

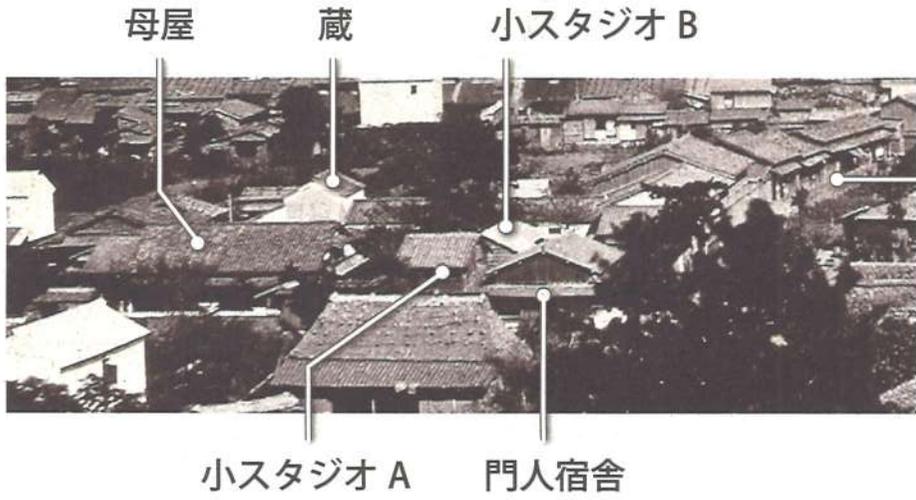
①新大工町の鳥瞰 1866年ごろ ボードインコレクション (長崎大附属図書館蔵)



上野彦馬とその時代

姫野順一

②硝石精錬所跡に開業して4年後の上野撮影局



精錬所・更紗場跡

14 撮影局の変遷

上野彦馬が文久2(1866)年、伊勢から帰郷して住んだのは父俊之丞亡き後母伊曾が住んでいた銀屋町の家であった。その秋に、父が創設した中島の硝石精錬所跡で撮影局を開業した。このあたりの経緯は連載の第5回目で紹介したが、今回はその後の撮影局の変遷をたどってみたい。1866(慶応2)年ごろ、風頭から新大工方面を撮影した鳥瞰写真①には、慶応年間の撮影局全体が写し出されている。屋敷部分を拡大した写真②を見ると、開業当初は空き地であった中庭の母屋の横に小さな小屋が建てられている。

ここが彦馬撮影局の初期写真、すなわち坂本龍馬をはじめ幕末の志士や諸藩の武士、外国人、長崎の庶民たちが撮影された初期のスタジオ(写場、小スタジオA)である。さらにその右に立つ小さい小屋も幕末には写場(小スタジオB)として使われたようである。

イタリア系イギリス人写真師、フェリーチェ・ベアトに学び、大型カメラを購入した

小スタジオ B



母屋

大スタジオ

③1872年ごろの撮影局 ウィーン万博出品アルバム(国立東京博物館蔵)

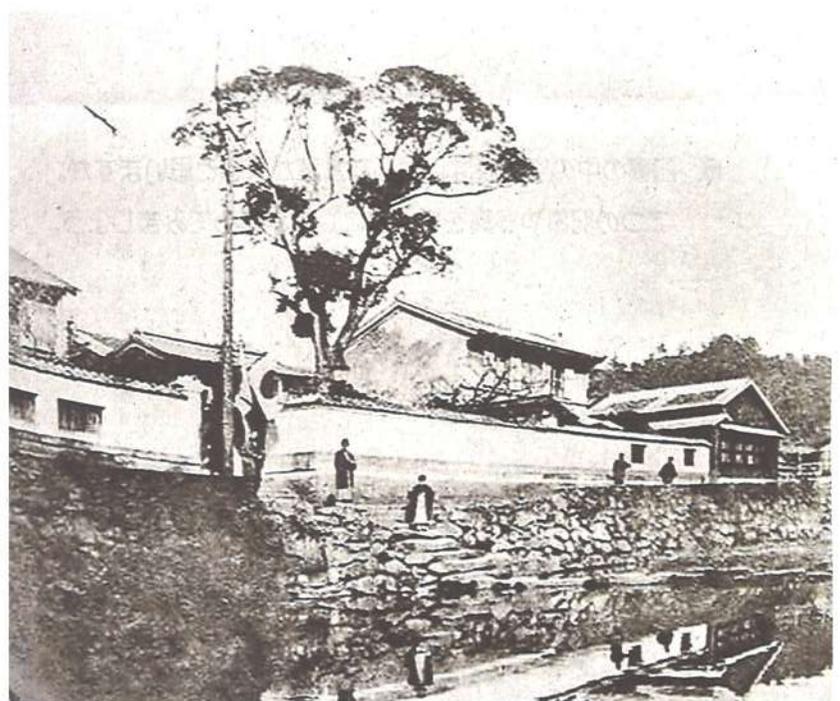
小屋から「ビードロの家」に

新大スタジオ (ビードロの家)



母屋 (2階建て) 旧大スタジオ

⑤1889年ごろの撮影局 長崎鳥瞰(4枚組) 新大工付近 (長崎歴史文化博物館蔵)



⑥1883年ごろの撮影局遠景 (上野一郎「写真の開祖上野彦馬」所収)

彦馬が、景観および人物の写真術を飛躍させたのは慶応の末年であったが、明治元(1868)年ごろの大スタジオ建設が彦馬写真のもう一つの画期であった。

1873年5月のウィーン万博に彦馬が出品した写真アルバムの中に、明治5(1872)年ごろ撮影した鳥瞰写真があり、写真③はそれを拡大したものである。慶応年間



④1868年10月に撮影されたフルベッキ(中央)と佐賀藩致遠館の学生たち (長崎大附属図書館蔵)

の写真と比較すると、かつて写真修行の弟子(門人)の宿舍となっていた建物が、大スタジオに改築されている。一方、龍馬らを撮影したスタジオ(小スタジオA)は消滅している。

大スタジオで撮られた写真としては、幕末の長崎で英語教育とプロテスタント・キリスト教の宣教に従事したフルベッキと、長崎に置かれた佐賀藩の英語学校・致遠館の学生たちと一緒に収めた写真④がある。フルベッキが東京に立出するのの際に、明治元年10月に、学生と記念撮影したものであることが分かっている。新設間もない大スタジオの姿を写しだしているという点でも実は興味深い1枚といえる。

彦馬の写真是明治初期になると、土間に敷石のある場所で撮影されたものが多くなるが、この大スタジオで撮影されている。

彦馬は明治15(1882)年に母屋を2階建てに改築し、このとき屋敷の奥に天井に斜めのガラス(スラント)を張った「ビードロの家」と呼ばれる2階建てのスタジオを新築した。この様子も鳥瞰写真を拡大した写真⑤により確認できる。これが全盛期の彦馬スタジオの配置である。

写真⑥は、彦馬がこれを正面から撮影している。この奥のガラス張り同形のスタジオは、弟子の富重利平が模し、熊本市の富重写真所に現存している。

彦馬のスタジオは幕末の粗末な小屋から明治に入ると大スタジオに転換し、明治15年からは2階建ての洋風でおしゃれなガラス張りのスタジオが発展した。彦馬の隆盛ぶりがよく分かる。

(長崎外国大特任教授) Ⅱ 次回は8月18日掲載予定 Ⅱ